

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	谷本富の思想と教育実践 : デューイ思想との繋がり
Author(s)	任, 雅楠
Citation	倫理学研究 , 27 : 17 - 33
Issue Date	2021-09-30
DOI	
Self DOI	10.15027/51899
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051899
Right	
Relation	



谷本富の思想と教育実践—デューイ思想との繋がり

任 雅楠

はじめに

現在、日中両国は教育に関するさまざまな問題を抱えている。受験競争の過熱、いじめ、学力低下、学級崩壊、暴力行為、薬物乱用、犯罪被害、少年非行、自殺、家出など教育荒廃の現象が社会的に大きな関心を集めている。このような状況下で多く見られるのは、本来あるべき健やかな子どもの姿が失われるという事態である。

これらの問題を解決するには、子ども本来の在り方に焦点を当て、現在の体制のみならず、教育原理・方法の研究がこれまでもたらした数々の知見を結集して解決の糸口を探る必要がある。その際、二つの時期に焦点を当てたい。ひとつは、子どもの個性や主体性や経験に大きく舵を切り、児童中心主義のもとで展開された中華民国期の教育と日本大正期新教育運動である。いまひとつは、現在の日本の「生きる力」を育む教育と中国の「素質教育」改革である。我々は、両国のこれらの時代において児童中心主義教育の点で双方から高い評価を得たアメリカの哲学者ジョン・デューイ(John Dewey : 1859-1952 ; 以下デューイと称する)の教育思想とその受容に注目したい。というのは、この二つの時期に両国でともにデューイの教育思想が学問的にも教育行政的にも注目され、高い評価を得るからである。

本論文では、これらの中の一つの時期である日本大正期において、デューイの思想を受容・紹介した谷本富(1867-1946)の思想と教育実践に焦点を当てて考察したい。谷本は明治時代から昭和時代初期にかけて活躍し近代日本の教育の発展に大きな力を注いだ教育家として知られ、新教育運動のリーダー、大正デモクラシーの開拓者として評価されている。

日中両国における谷本富の教育思想と実践に関する先行研究としては、池田(1958)、堀松(1970)、福西(1985)、菅生(1996)、稲葉(2004)、衛藤(2012、2018)などが挙げられる。ところが、谷本をめぐるこれらの論評は様々で定まっていない。したがって、本稿

では、日中のデューイ思想受容を課題とするため、先行研究をふまえて谷本の生涯と業績を概観した上で、彼の教育思想や実践がデューイの思想と親和性が最も高いと思われる時期に絞って谷本におけるデューイ思想の位置づけを浮き彫りにしていく予定である。具体的には、谷本富が欧州留学より帰国した明治 35 年(1902)から大正デモクラシー期(1910～20 年代)にかけての教育思想と実践に焦点を当てて考察してみたい。

1. 谷本富の略歴

先に見たように、谷本富は明治時代から昭和時代初期にかけての教育家として知られ、新教育運動の旗手、大正デモクラシーの開拓者として評価されている。しかし、そうした評価の反面、学界におけるその人物や学説に関する毀誉褒貶の激しい議論もまた知られている。以下、これらの議論を概観した上で谷本の生涯全体を描き出してみたい。

谷本富は 1867 年、讃岐国高松に生まれ、明治 10 年(1877)高松中学校に入学し、その翌年、高松医学校に転学し、医学と独逸学を勉強し、在学三年首席の成績で卒業した¹。その後、明治 15 年(1882)に上京し中村敬宇の同人社で英語を勉強し卒業した後、東京帝国大学文科大学特約生教育学科に入学した²。この時期、谷本は、日本に初めてヘルバルトを紹介した東京帝国大学講師独逸人ハウスクネヒトの下で勉強していた。したがって、必然、彼は在学中ヘルバルト学風の影響を受けることになる³。明治 23 年(1890)同大学を卒業し山口高等中学校の教授となり、さらに明治 27 年(1894)には日高真実の後任として東京高等師範学校の教授になり、ここでヘルバルト教育学の受容と宣伝に力を尽くすことになる。同年の『实用教育学及教授法』(明治 27 年(1894))と翌年の『科学的教育学講義』(明治 28 年(1895))がこの期の代表作として挙げられる。それに谷本はこの時期、国民道徳の昂揚に資する教育学としてヘルバルト教育学の五理念(「内心の自由」「完全」「好意」「正義」「報償」)を儒教の五倫五常(「仁」「義」「礼」「智」「信」)と結びつけるなど、ヘルバルト教育学を日本的に発展させることに大きく寄与し⁴、ヘルバルト教育学の宣伝者として知られるようになった。

しかし、日清戦争以来のナショナリズムの昂揚と急速な資本主義の発展の下で、明治

30年代に入ると、谷本はヘルバルト流の教育学を批判し、国家主義教育を主張していく。このことは、明治31年(1898)、谷本が著した『将来の教育学』の序言の中に顕著に表れるようになる。それに加えて谷本は、社会的国家主義の立場をとって、「将来の教育学はまさに国家的教育学でなければならぬ」とし、「国家教育学というものは一国の維持と繁栄を目的とせる教育説である」⁵と主張した。同年、谷本は文部省視学官を兼ねて、その翌年、教育学研究を理由に欧州留学を許可され⁶、英、仏、独などの諸国を歴遊した。彼は、三年間にわたる留学期において、当時の欧米の新教育運動に触れ、その思想に大きく共鳴することになる。とりわけ彼の心を強く捉えたものはイギリス帝国主義に対抗できる有能なフランス帝国主義の担い手の育成を目指していたドモランの新教育運動であった⁷。この留学が彼の教育思想に再転の契機をもたらした。

明治35年(1902)に帰国した後、谷本は東京高等師範学校の教授を辞めて、その翌年、京都帝国理工科大学の講師となり、同年米国を視察し帰朝した。その後、明治38年(1905)に教育学で初めて文学博士の学位を取った⁸。同年、始めて京都市教育界の求めに応じて講演を行って、この講演の内容を踏まえて、その翌年の明治39年(1906)に『新教育講義』を編纂し出版した。この講演が谷本における新教育提唱の第一声として知られている。この年、谷本は京都帝国大学文科大学の教授になり、教育学教授法講座を創設し、その初代の講座担当者となった。その意味で谷本は、現在の京都大学教育学部の源流を開いた学者といえる⁹。しかも、この時期の谷本に特徴的であったことは、大学での教育学研究が、教育の本質についての単なる抽象的・観念的哲学的思弁に終始するものではなくて、現実の教育実践の世界と実際的な関連をもつものとして考究されたことにある¹⁰。その後、各地における新教育思想の講演の内容を踏まえて、明治40年(1907)に『系統的新教育学綱要』、明治41年(1908)に『新教育者の修養』、明治42年(1909)に『新教育の主張と生命』が谷本によって続々と出版された。彼は新教育運動の先駆者として、その運動に力を尽くしていくのである。この時期の教育目標に掲げられた人間形成像は、「活人物」であった。そしてその育成を目指す教育を彼は「活教育」と呼んだ。それは、それ以前のヘルバルト流の個人教育学や国家主義教育学に対して、より活きた

個々人の具体的な生を重視する内容であった。その方向の探究は、谷本を、大正デモクラシー期に注目されるアメリカのプラグマティズムに見られる实用主義に惹きつけていく¹¹。この新教育運動に向かう谷本の姿勢と見方は、その後の宗教教育の段階へとつなぐ伏線となる。

谷本は、大正2年(1913)、沢柳事件¹²により、京都帝国大学を退任して、龍谷大学に転職した。この時期、谷本は、大正デモクラシーと言われた時代の風潮を受けて、実験的・実用的な立場をとっており、すでに大正デモクラシーの開拓者として知られるようになっていた。谷本は大正6年(1917)に、「余輩が文部大臣なりせば」という文章を書き、学校教育の現場に対して提言を行った。そして、大正12年(1923)には、この時期の代表作であり、彼の最も体系的な教育学概論書と言われる『最新教育学大全』が刊行された。

大正デモクラシー期以降の谷本については、一般には、「宗教教育に墮した」とされるが、衛藤によって、それ以前の谷本の研究と整合性をもって以下のように述べられる。谷本自身の記述を見れば、彼は自らの思想変遷に第五期を見ている。つまり、彼によれば、自らの度重なる思想転換には、「宗教教育」の探求という姿勢が終始一貫しており、第五期においてそれが結実する¹³。実は谷本の生涯を振り返ってみれば、各段階の時期において、「宗教教育」の理念との関連が多少とも見える。まずは、生い立ちから見ると、谷本の記述によれば、彼の「宗教」への関心は幼児期にすでに芽生えた。それは、彼によれば、亡父さんのご遺言によって啓発されてきた「水戸学の尊皇敬神の愛国心」と祖母さんから受け継いだ「真実真宗の仏教的信心」に由来する「宗教観念」であるとされる¹⁴。そうした幼児期から培われた宗教的精神に関する具体的な成果論文としては、東京帝大在学中に著された「支那古宗教論」(『哲学雑誌』、明治21年(1887))などが挙げられる¹⁵。卒業後赴任した山口高等学校の教員時代(明治23年-26年(1890-1893))には、谷本は徹底したヘルバルト主義をとっていた。その立場においては教育学の基礎に宗教を置くことが拒絶されるが、そうした中でも道德教育の涵養に宗教的感情が必須であるとし、そのことを、吉田松陰の「至誠動天」の精神を例として挙げて、学生たちに

説き続けたとされる。このように谷本は近代西洋思想に自己の立場を投影させるものの、生涯、一貫して日本固有の視点を加味した教育学を確立することに努めた¹⁶。但し、この時期の記述には、「宗教教育」という概念は明確に示されていない。

この時期以降、欧米留学後の第三期(明治 35 年(1902)～大正 2 年(1913))に入ってから、谷本は次第にヘルバルト流を離れて、明確に自己の教育学の基底に宗教教育を位置づけていくことになる。この時期の代表作としての『新教育講義』においては、「明治維新以来わが帝国の教育は漸漸と教育と宗教というものを分離する方針を取って参って、今日ではほとんど教育と宗教というものはまったく別のものになってしまった」と批判的に振り返り、教育にとって、宗教的基盤が必要であることをあきらかにしてきた¹⁷。さらに、谷本は宗教教育を推進するために、講演や講義で宗教教育を取り上げつつ、その理論化を本格的に進めていく。谷本の言う「宗教教育」とは、「単なる一宗一派の教育」という「宗教教育」を意味せず、「よりよく生きる」ことに向けた広義の精神科学的教育ともいうべき内実を含んでいた。ここで主張される谷本の「宗教教育」では、徹底した観察・内省・体験に基づき現象の本質が考究され、そこで得られた内観的理解の程度に応じて真善美が個別に体现されていく¹⁸。この意味で、第三期における谷本の思想は、特殊が特殊を窓口として具体的で普遍的な成熟を目指す変容プロセスを支持する立場といえる¹⁹。

その後続く第四期(大正 2 年(1913)～大正 12 年(1923))において谷本は経験概念を基盤に「潜在意識的我」と普遍との合一を説くウィリアム・ジェームズ(1842-1910)のプラグマティズムやベルクソン(1859-1941)の創造的進化論に傾倒し、そこに自らの「宗教」概念を重ね見ようとした。しかし、谷本にとって、実在の根源との関係を含まない生活有用性や流動性の概念は、個人の深い感情的信念に貫かれた人格的変容を説明できないものと解された²⁰。とりわけ彼はこの時期ベルクソンの思想に自らの理論基盤を求めるが、結局、そこからは確たる基礎づけを得ることができていない²¹。

そうした中で、第五期(1923 年以降)に至り、自分の宗教的変容論を満たす思想として、ドイツの思想家 R. シュタイナー(1861-1925)が創設した人智学に出会う。谷本の宗教

教育学の構想は、1923年以降の第五期において文化教育学や精神科学的教育学を受容する中で、初めて理論的指針を見出すことになったのである。1929年に出版された『宗教教育の理論と実際』の中にその成果が示されている²²。その記述によれば、谷本は無意識を対象とする心理学研究を進める中、精神科学的心理学に関心を抱くようになり、最終的には、ドイツの思想家シュタイナーの人智学に出会い、そこに自らの教育哲学の雛形を見た²³。そのシュタイナーによる人智学的精神科学こそが、彼が目指す「日本独自の仏教的教育学」にかなうパラダイムとして受け入れられたのである。そして、その理論枠組みに基づく教育実践について、「学校における宗教教育の方法としては、シュタイナーのワルドルフシュレを参考にしたらばよろしかろう」²⁴とシュタイナー教育を理想的なモデルと考えたのである。

以上のように谷本は第五期に入ってから、プラグマティズムと離れて、シュタイナー思想に基づく教育理論を構築することになる。だが、最晩年に谷本は自らの宗教教育の完成を精神科学としてのシュタイナー教育学に見、それを仏教理論と融合し体系化することを構想した谷本ではあるが、それは着想を得たにとどまり、彼が目指した妥当性をともなう宗教教育学理論の確立には至らなかったといえる²⁵。そして、昭和21年(1946)、この偉大な教育者の生涯は閉じることになる。

以上見てきた谷本富の生涯を振り返ると、谷本は「宗教教育」という課題を軸としながらも、極めて敏感に時代の要請を感じ取って、時代の思潮に反応して自らの教育思想を構築し実践を展開していったことが分かる。これらの考察を踏まえ、彼の思想と教育実践を解明するためには、下記の五つの時代の思想の特徴を理解することが重要となる。すなわち、(1)「ヘルベルト派の盲信時代」(山口高等学校教授～東京高等師範教授時代前期「兼東京博物館主事・文部省視学官」時代前期：1890年代前半)、(2)「一国の隆盛繁栄を旨とする教育学説の時代」(東京高等師範教授時代後期：1890年代後半)、(3)「新教育思想への主張期—デューイ思想との繋がり」(欧州留学後～京都帝国大学教授時代：明治35年(1902)～大正2年(1913))、(4)「実験主義を尊重する時期—デューイ思想の受容と革新」(1913年退職後～1923年の『最新の教育学大全』出版まで)、(5)「宗

教教育＝東洋的教育哲学の完成期」(大正12年(1923)以降)である²⁶。

ただし、本研究では、日中のデューイ思想受容を課題とするため、谷本思想の全体をふまえた上で、デューイの思想と親和性が最も高い部分に焦点を当てることにしたい。具体的には、谷本富が欧州留学より帰国した明治35年から大正デモクラシー期が終わるまでの教育思想と実践(「新教育思想への主張期—デューイ思想との繋がり」と「大正デモクラシー期—デューイ思想の受容と創新」)に焦点を当てて考察してみたい。

2. デューイ思想との繋がり—新教育運動期と大正期デモクラシー期を中心に

谷本富自身、自らの思想の変転の歴史を振り返って、第四期の思想を「プラグマティック」²⁷であると言っているように、この時期の自らの思想を実験的・実用的な立場だと自認している。それに、デューイ思想の受容と言え、時期的には大正デモクラシー期(1910～20年代)だと思われがちであるが、谷本の新教育運動期の思想を見れば、必ずしもそうではないことが分かる。なぜなら、欧米の新教育思潮の影響を受けていた谷本が編纂した一連の著書や活動に民主主義の思潮や新教育の思潮を見出せるからである(新教育運動自体は19世紀末から欧米で起こり、それを日本で展開したのが大正期で、それを日本では大正新教育運動と呼んでいる)。それに、ドモランの教育をモデルとした谷本の新教育運動は後の大正新教育運動の先駆をなすと思われる。上記のことに鑑みれば、谷本が実験主義を受容した原点は大正新教育期以前にあり、実験主義の受容の必然性があると考えられる。それゆえ、デューイ思想との繋がり进行を明らかにするために、第三期のすべての思想と実践を無視してはいけない。それゆえ、欧州留学(1898-1902)を終えた後の谷本の教育思想を詳細に読み解く必要がある。

谷本の新教育論は当時欧米の教育革新の運動を広く吸収して生まれたものであり、ドモラン、エレン・ケイ、デューイなどの主張が受け入れられた。まずは、明治期における谷本の新教育思想の説明について見ていこう。谷本富が主張した新教育を簡潔に言えば、自然の摂理に随う教育である。これに対して、自然に背いている教育は皆旧教育だと認められる。具体的には、以下のように述べられている。「元来児童なり少年なり、燃

ゆるが如き活気のあるべきはずの時に大人同様の方正を強いることは天に背くもので、子どもには自ら生理上、心理上の要求があり、それを無理に抑えることは不自然な教育である」²⁸。このような見解を通して谷本は、注入主義を否定し、児童中心主義の教育を提唱するのである。そうした見方は必然、新教育学者としてのルソー、バセドーなどの自然主義教育観をも視野に入れることになる。しかし、谷本は彼らの主張に感心しながらも、ルソーの理論の非現実性、バセドー主張の個人主義への偏向性など、それぞれ個々の教育思想の欠陥を指摘している²⁹。彼は新教育の目的を、自然の摂理の内に生き生きと生きる新人物・活人物の形成に求めた。さらに、日本の伝統文化、伝統慣習と結びつけて、新教育を定義した。国家主義教育方針を十分に受け入れ、国家と個人の相互の利益のため自己発展主義を説くことが「新教育」の骨子であると捉えている³⁰。

この時期における谷本の代表作は『系統的新教育学綱要』(1908:明治41年)である。本書において、谷本は欧米における新教育運動の先駆をなしたアボッツホルム学校(英)、リーツ学校(独)、サーチの理想学校(米)を次々と紹介している³¹。これらはいずれも共同生活の習慣及び自治の習慣を養い、天地自然の環境で生活する田園教育舎学校の形式をとり、理科、園芸、手工などの実科を重んじる³²。実科教育を重視する田園教育舎の教育理念を受けて、谷本は、自身の実科教育実践理論を打ち出した。谷本は、この新教育の鍵を握る教科目こそ「手工科」であると力説し、手工教育の有意性を論述する際、フレーベル、デューイなどの教育学者を引き合いに出した³³。ここにデューイへの注目が初めて著作に記載された(これに先立ち、1905(明治38)年から1906(明治39)年にかけて行った京都や四国における講演で、谷本はすでに、ドモランやデューイを紹介している)。この「手工科」について谷本は、「加設科目としてのとり扱いの手工科を普通・高等小学校とも必修科目としてのみならず、これを小中学校の中学に位置付ける」ことを主張した³⁴。谷本はこの手工教育の効果について、その教育に、「体育上の価値」、「知育上の価値」、「情育上の価値」、「言育上の価値」、「道徳教育上の価値」、「国民教育上の価値」、「人道教育上の価値」、「宗教教育上の価値」を見、その積極的導入を提唱した³⁵。

いま一つ注目すべき谷本の明治期の著書として、『新教育講義』が挙げられる。『新教

育講義』の中で「自学補導」主義の教育理念が打ち出されたことは注目に値する。「自学補導」とは、予習、復習、練習を学習・教授の中心に置く「自学主義」の教育形態であり、時代を切り拓く「新人物」を多く育成することを目的とするものである。この谷本による「自学補導」という理念は明治から大正にかけて全国の師範学校附属小学校などに広がり、教育界に大きな影響を与えていた。特に福岡では一般の小学校にまで影響を及ぼした³⁶。

さらに大正期に入ると、谷本の教育理論は実践とより結びつき、一層発展されるようになった。大正7年の「戦後の日本教育界」という論文の中で、谷本はこの時代における教育改造の基本的視点を明確にしている。「在来の様な官僚国家主義では駄目である。時代後れである。これを救う急務は、プラグマティズムに拠り、デモクラシーを旨とするの外あるまい」³⁷と述べるに至る。谷本はこの時期、実験的・実用的立場を踏まえて、自らのデモクラシー論と文化運動論を展開していくことになる。

現在においても、大正デモクラシー期になされた八大教育主張(1921)や、新教育、進歩主義教育とデューイの教育思想を繋げた代表者として谷本富の名がよく挙げられる。この時期、谷本富は、明治期に出した「自学補導」を踏まえて、「児童中心主義」の理論を発展させていった。子どもの個性的な成長と感情を重視し、子どもは社会と深く関係付けられるべきだと主張する。この時期の谷本の主張について、関(2008)は、①学校は教学を画一化せず生徒の個性的な発展と差異を重視すること、②学校は学術ではなく日常生活に密着した知識を重視すること、③学校は子どもの知的な成長より感情的な成長のほうを重視することの三点に焦点化できるという³⁸。

谷本自身は、教育実践の場合において、学校を教育改革運動の拠点としてとり扱い、学校教育者の立場から、全体的な原則と具体的な提案を出している。全体的には、彼は、「権威排斥、外律排斥、内律尊重、自発尊重」、「児童本位、個人本位、人類本位」³⁹という理念を打ち出した上で、小中学校などの教育実践を指導する際、一般性、抽象性を免れるために、この原則に沿って具体的な提言をする。この内容は、谷本の「余輩が文部大臣になりせば」という論稿の内に教育改革の二十の視点として表されている⁴⁰。それ

は、「①教育勅語の遵奉や「五箇条の御誓文」の重視」、「②小中学校教育内容のプラグマティック化」、「③倫理道徳観の改革」、「④教育制度の画一化の否定」、「⑤公立小学校教員俸給の国庫支弁化」、「⑥義務教育年限の延長」、「⑦教員待遇の改善」、「⑧自学補導を教育方針とすること」、「⑨中学校進学制度に関する改革」、「⑩中学校教育制度の改革(完成中学と予備中学の設立)」、「⑪実業教育への推進」、「⑫高等学校教育制度の改革」、「⑬大学教育制度の改革」、「⑭大学教員採用制度と待遇改善に関する改革」、「⑮専門学校の改革」、「⑯師範学校の付設」、「⑰外国人教員の招聘と教員の海外留学の推進」、「⑱美術教育の推進」、「⑲女子教育の普及」、「⑳宗教教育の重視」など、多方面の改革視点を挙げている。

さらに、以上の視点を踏まえて、谷本は今後の小学校教育改造についての希望を十箇条にまとめて提起している。それは、「①法よりも人に重きを置くこと」、「②文字よりも実物に重きを置くこと」、「③人工よりも自然に重きを置くこと」、「④注入よりも工夫することに重きを置くこと」、「⑤習うよりも働くということに重きを置くこと」、「⑥体育に注意すること」、「⑦品性を陶冶すること」、「⑧学校と家庭と一層密に連絡すること」、「⑨教育を社会的事業と考えること」、「⑩宗教的精神を帯びしむ可きこと」⁴¹という十項目である。

以上の視点と項目は当時の教育改造についての彼の総括的提案とみることができる⁴²。加えて、谷本は実践の実現に向けた教育学理論自体についても研究を深めていっている。なかでもこの時期の代表作である『最新教育学大全』(1923：大正12年)の第三章において教育学の具体的な研究法が述べられている。「観察法」「比較法」「実験法」などがそれに当たる⁴³。それに加えて、本書の本論において、教育学理論自体を「教育方法論」、「教育設備論」、「教育当体論」、「教育本然論」と細かく分けて記述している⁴⁴。ここからは谷本が教育学を一般に理解可能な科学的で体系的なものにしようとの熱意が充分にうかがえる。教育学研究の範囲を体系的に整然と分類して、教育学の範囲を学校に限らず、広く家庭や社会にも押し広げていくこと目指された⁴⁵。こうした谷本による新教育の主張は当時の教育界に大きな波紋を投げかけると同時に、教育に携わる人々に対する開眼

の役を演じたことは否めない。この谷本の新教育の主張が日本の新学校として具体化したものが、明治45年に中村春仁によって東京に創立された成蹊実務学校であった⁴⁶。柿沼(1990)によると、成蹊実務学校では、「独立自治」の養成をはじめとした「活きたる道徳教育」を目指して、子どもの個性、自発性が尊重された⁴⁷。

おわりに

本論の考察を通して見てきたように、谷本富の生涯を振り返ると、谷本は「宗教教育」という課題を軸としながらも、極めて敏感に時代の要請を感じ取って、時代の思潮に反応して自らの教育思想に基づいて実践を展開していったことが分かる。彼の思想と教育実践を解明するためには、本論で論及した五つの時代の思想特徴をふまえることが重要となる。

とりわけ、本論の課題であるデューイ思想との関係で言えば、これらの時期の中では、欧州留学後(明治35年(1902))から大正期末年((大正12年(1923))までの第三期と第四期の教育思想と実践が深い関わりをもった。この時期における谷本富によるデューイ的思想の受容について本論での考察結果を概括してまとめたい。

本論の考察から判明した特記すべき点は、谷本が実験主義を受容した原点は一般に言われる大正新教育期以前にあり、当時においてすでに実験主義受容の必然性があったことである。それゆえ、デューイ思想との最初の繋がりを明らかにするためには、第三期のすべての思想と実践について考察する必要がある。谷本の第三期の新教育論は当時欧米の教育革新の運動を広く吸収して生まれたものであり、ドモラン、エレン・ケイ、そしてデューイの思想や実践について関心が向けられた。谷本がこれらの思想を継承しつつ批判し、自分固有の主張を提出してきた。さらに、この時期、谷本は、実科教育を重視する田園教育舎の教育理念を強く支持し、自身の実科教育実践理論を打ち出した。谷本は、世界が求める新教育の鍵を「手工科」に見出し、その手工教育を重視する実践例として、フレーベル、デューイを引き合いに出す⁴⁸。そして、注目される点として、この時期すでに、後に重視される子どもの主体性、個性、自主性を先取する見方として、

「自学補導」という教育理念が『新教育講義』の中で打ち出されたのである。

さらに大正期に入ると、谷本の教育理論は実践とより結びつき、一層発展されるようになった。ここでは、注目したいのは、大正7年の「戦後の日本教育界」という論文の中で、谷本はこの時代における教育改造の基本的視点を明確にしている点である。つまり、谷本はこの時期、実験的・実用的立場を踏まえて、自らのデモクラシー論と文化運動論を展開していくことになる。具体的には、この時期、谷本富は、明治期に出した「自学補導」を踏まえて、「児童中心主義」の理論を発展させていく。子どもの個性的な成長と感情を重視し、子どもは社会と深く関係付けられるべきだと主張する。それに、理論面に限らずに、谷本自身は、教育実践の場合において、学校を教育改革運動の本拠地としてとり扱い、学校教育者の立場から、全体的な原則と具体的な提案を出している。さらに、一般性、抽象性を免れるために、小中学校などの教育実践の場に対して、この原則に沿って具体的な提言をする。そこで彼は教育改革の本論で確認した二十の視点を提起していることに加えて、実践の実現に向けた教育学理論自体についても研究を深めていっている。なかでもこの時期の代表作である『最新教育学大全』（1923：大正12年）の第三章において教育学の具体的な研究法を述べることになる。こうした谷本による新教育の主張は当時教育界に大きな波紋を投げかけると同時に、教育に携わる人に対する開眼の役を演じたといえる。

参考文献

池田進「谷本富教授の生涯と業績」『京都大学教育学部紀要』第4巻、1958年。

池田進「敗北の教育学者(谷本論承前)一ひとつの運命一」『京都大学教育学部紀要』第5巻、1959年。

稲葉宏雄『近代日本の教育学－谷本富と小西重直の教育思想』世界思想社、2004年。

梅根悟『世界教育史』下巻、光文社、1955年。

衛藤吉則「谷本富におけるシュタイナー教育学の受容過程－谷本の「宗教教育」観を基軸として－」『日本仏教教育学研究』9号、2001年。

衛藤吉則「近代の肖像—危機を拓く(第 523 回)・宗教と教育」『中外日報』2012 年 3 月 1 日。

衛藤吉則「近代の肖像—危機を拓く(第 524 回)・よりよく生きる」『中外日報』2012 年 3 月 3 日。

衛藤吉則「近代日本の教育思想史に関する研究視点:谷本富と西晋一郎に対する歴史的評価の再考」『HABITUS』西日本応用倫理学研究会、第 22 巻、2018 年。

柿沼肇『近代日本の教育史』教育史料出版会、1990 年。

関松林『交流と融合:デューイと日本教育(交流与融合:杜威与日本教育)』教育科学出版社、2008 年。

菅生均「谷本富の手工教育論に関する一考察」『熊本大学教育学部紀要 人文科学』第 45 巻、1996 年。

谷本富「序言」『将来の教育学』六盟館、1898 年。

谷本富『新教育講義』六盟館、1906 年。

谷本富『系統的新教育学綱要』六盟館、1907 年。

谷本富『現代思潮と教育の改造』、同文館、1919 年。

谷本富『教育界の現状打破』、同文館、1917 年。

谷本富『最新教育学大全』同文館、1923 年。

谷本富『宗教教育の理論と実際』明治図書、1929 年。

谷本富「時局と教育家」『教育学術界』第 75 巻第 2 号、1935 年

福西信幸「谷本富の新教育論についての一考察」『梅花女子大学文学部紀要 人文・社会・自然科学編』第 20 集、1985 年。

堀松武一「谷本富における教育思想の変遷」『東京学芸大学紀要』第 21 集、第 1 部門、1970 年。

¹ 池田進「谷本富教授の生涯と業績」『京都大学教育学部紀要』第 4 巻、1958 年、pp. 3-9

² 池田(1958)、同上。

-
- ³ 池田(1958)、同上。
- ⁴ 堀松武一「谷本富における教育思想の変遷」『東京学芸大学紀要』第21集、第1部門、1970年、pp. 27-28
- ⁵ 谷本富「序言」『将来の教育学』六盟館、1898年、p. 21
- ⁶ 池田(1958)、同上。
- ⁷ 堀松(1970)、p. 34
- ⁸ 池田進「敗北の教育学者(谷本論承前)一ひとつの運命一」『京都大学教育学部紀要』第5巻、1959年、pp. 155-168
- ⁹ 稲葉宏雄『近代日本の教育学－谷本富と小西重直の教育思想』世界思想社、2004年、p. 36
- ¹⁰ 稲葉(2004)、同上。
- ¹¹ 福西信幸「谷本富の新教育論についての一考察」『梅花女子大学文学部紀要 人文・社会・自然科学編』第20集、1985年、p. 31
- ¹² 沢柳事件(さわやなぎじけん)は、大正2年(1913)から大正3年(1914)にかけて京都帝国大学(現京都大学)で起こった、学長(沢柳政太郎)と学部教授会との間の内紛事件である。「京大事件」とも呼ばれ、大学における教授会自治を確立させるきっかけとなった事件として知られている。この事件の中で、沢柳は「学問上、人格上、帝大教授として不適」ということを理由として、天谷千松(医)、吉田彦六郎、横堀治三郎、三輪恒一郎、村岡範為馳、吉川亀次郎(以上、理工)、谷本富(文)の七教授に辞表の提出を求めた。
- ¹³ 衛藤吉則「近代日本の教育思想史に関する研究視点:谷本富と西晋一郎に対する歴史的評価の再考」『HABITUS』第22巻、2018年、西日本応用倫理学会、p. 23,谷本富「時局と教育家」『教育学術界』第75巻第2号、1935年、p. 27
- ¹⁴ 衛藤吉則「近代の肖像－危機を拓く(第523回)・宗教と教育」『中外日報』2012年3月1日
- ¹⁵ 衛藤吉則「近代の肖像－危機を拓く(第523回)・宗教と教育」『中外日報』2012年3月1日
- ¹⁶ 衛藤(2012)、同上。
- ¹⁷ 衛藤(2012)、同上。
- ¹⁸ 衛藤吉則「近代の肖像－危機を拓く(第524回)・よりよく生きる」『中外日報』2012年3月3日
- ¹⁹ 衛藤吉則「近代の肖像－危機を拓く(第524回)・よりよく生きる」『中外日報』2012

年 3 月 3 日

²⁰ 衛藤吉則「近代の肖像—危機を拓く(第 524 回)・よりよく生きる」『中外日報』2012 年 3 月 3 日

²¹ 衛藤(2018)、p. 24

²² 衛藤(2018)、同上。

²³ 衛藤(2018)、同上。

²⁴ 衛藤(2018)、同上、谷本富『宗教教育の理論と実際』明治図書、1929 年、p. 34 参照

²⁵ 衛藤吉則「谷本富におけるシュタイナー教育学の受容過程—谷本の「宗教教育」観を基軸として—」『日本仏教教育学研究』9 号、2001 年、p. 266 参照

²⁶ 衛藤吉則「近代日本の教育思想史に関する研究視点:谷本富と西晋一郎に対する歴史的評価の再考」『HABITUS』第 22 巻、2018 年、西日本応用倫理学研究会、p. 23,堀松(1970)、pp. 26-36 参照

²⁷ 谷本富『最新教育学大全』同文館、1923 年、p. 7

²⁸ 谷本富『新教育講義』六盟館、1906 年 pp. 105-07

²⁹ 菅生均「谷本富の手工教育論に関する一考察」『熊本大学教育学部紀要 人文科学』第 45 巻、1996 年、pp. 121-122

³⁰ 菅生(1996)、同上。

³¹ 谷本富『系統的新教育学綱要』六盟館、1907 年、pp. 233-256

³² 堀松(1970)、p. 32

³³ 菅生(1996)、同上。

³⁴ 菅生(1996)、同上。

³⁵ 谷本(1906) pp. 384-395

³⁶ 柿沼肇『近代日本の教育史』教育史料出版会、1990 年、p. 128

³⁷ 谷本富『現代思潮と教育の改造』、同文館、1919 年、p. 320

³⁸ 関松林『交流と融合：デューイと日本教育(交流と融合：杜威と日本教育)』教育科学出版社、2008 年、p. 78

³⁹ 谷本(1919)、p. 33

⁴⁰ 稲葉(2004)、p. 131

⁴¹ 谷本富『教育界の現状打破』、同文館、1917 年、pp. 464-465

⁴² 稲葉(2004)、pp. 131-137

⁴³ 谷本富『最新教育学大全』同文館、1923 年、pp. 64-79

⁴⁴ 谷本(1923)、pp. 82-170

⁴⁵ 池田(1958)、p. 16

⁴⁶ 梅根悟『世界教育史』下巻、光文社、1955年、p. 388

⁴⁷ 柿沼(1990)、p. 127

⁴⁸ 菅生(1996)、同上。

The Thoughts and Educational Practices of Tanimoto Tomeri

—The Connection with John Dewey—

Yanan Ren (Hiroshima University)

John Dewey was an American philosopher, psychologist, and educational reformer whose ideas have influenced education in Japan and China. Tanimoto Tomeri played a notable role in paving the way for this influence by introducing John Dewey to modern Japan (the Taisho era (1912-1926)). Tanimoto Tomeri (1867-1946) was an educational reformer during the Meiji era until the early Showa era and is valued as a leader of the Taisho-era Free Education Movement. He is believed to have contributed greatly to the development of education in modern Japan. In this paper, I will elucidate the connection between the thoughts of Tanimoto and those of Dewey by referencing Tanimoto's career and achievements. Specifically, I will highlight Tanimoto's ideological characteristics during various periods of his life. The study will reveal how, in the great tide of times, Tanimoto Tomeri accepted and renewed Dewey's ideas. I will examine in detail Tanimoto's ideas at each stage of his career and the connection between his ideas, his educational practices, and Dewey's thought.